

「非常時の日常」と学校教師 —教職科目オンライン授業序説(2)—

下地 秀樹

I. 非常時の日常：本稿の課題

本稿は前稿「非日常的日常の授業づくり」¹の補足となる続編である。現在進行形のCOVID-19によるパンデミック下で試行錯誤した、教職科目オンライン授業導入をめぐるささやかな備忘録として、前稿では、1) 2020年の11月末に至るまでのパンデミック状況を暫定的にふりかえり、2) 筆者が今年度(2020年度)春学期に担当したA大学、B大学での同趣旨の教職科目オンライン授業を概観し、3) 今後への反省と課題を覚え書き程度に整理した。

大学授業のオンライン化は、各大学でLMS構築などの素地はあったものの、政府による小中高校への唐突な一斉臨時休校要請や緊急事態宣言発令の見通しのなかで、大急ぎで「やるしかない」として進められた。A大学の学長は「平時なら10年にかかる変化が、4ヶ月で進んだ」とふりかえっている。これには、ICT関連スタッフの不眠不休のサポートがあったのだろう。

筆者の場合、僅か二つの大学での経験に過ぎないが、例年(予定)の学年歴より2週間遅れてA大学、さらに10日ほど遅れてB大学の授業を行うようになったことで、先行事例にも学びながら、案ずるより産むが易し、比較的スムーズにオンライン授業に慣れることができた。オ

ンライン化に対応するまでまったく知らなかった会議システムZoomの、とくにブレイクアウトセッションを活用することで、課題に即した学生どうしの議論と、これを踏まえたレポートの提出、毎回の集積という、従来の授業方法の核を維持しながら、オンラインによる資料提示、課題レポート提出の効率化をはかることもできた。

ただ、学生から見たらどのような風景なのか、じっくりと考えながら進めるだけの精神的余裕がなかったのは大きな反省点である。同趣旨(教育職員免許法施行規則の同区分に該当)の科目の授業であっても、おそらくは履修者の学年構成と授業期間の僅かな違いからか、受講の様子に違いが見られた。新入生が大半のB大学の授業の場合、キャンパス経験すらないままのオンライン授業のみの継続は次第に疲れを増大させたようであった。新入生のオンライン授業疲れは、筆者に特殊な経験、感想ではないようで、本学のアンケート調査などからも明確に窺えることである。新入生にはより丁寧な導入と、課題を過剰にしない工夫など、その後のフォローを行う必要性を思い知らされた。

このように前稿でオンライン授業導入の初動を概観したが、本稿では、その授業の一部に少

¹ 本誌の前号 = 『教職研究』第35号(臨時増刊号、2021年1月)所収(PP.47～60)。

し具体的に踏み入った考察を加えておきたい。

前稿で取りあげたように、筆者は今年度春学期、A大学で「教育原理」、B大学で「教育原論」をすべてオンラインで担当した。いずれも、現行の教育職員免許法施行規則に規定された科目「教育の基礎的理解に関する科目」の包含必要事項「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に該当する科目である。現行の教員免許法制から導入された「教職課程コアカリキュラム」には、教育の「基本的概念」、「歴史」、「思想」についての「一般目標」三つと、それぞれに関わる合計八つの「到達目標」が掲げられ、これらを包括する「全体目標」が記されている。教職課程の申請にあたっては、シラバスはもとより、具体的に各到達目標を学期中のどの授業回で扱うかを示す表の提出が義務付けられている。しかも、「教育実習」等を除く教職科目のすべてにわたって「アクティブ・ラーニングの視点等を取り入れること」が義務付けられている。

研究社の『新和英大辞典』には、「無理難題」の項に以下の例文があり、時折、ネット（SNS）上で話題になる²。だが、今年度の異例の状況下では、いかに文科省でも申請書通りの運用しか認めないわけではないだろう、と楽観的に柔軟に解釈してオンライン授業に臨んだ³。

The Ministry of Education and Science has made another impossible demand.

「教職課程コアカリキュラム」では「理解すること」を目標とされているが、筆者は従来から、「日常のあたりまえを問い直すこと」を提案してきた。敢えて「コアカリキュラム」の趣旨を踏まえて捉え直すなら、「理解すること」の前提、ベースとして、現行教育職員免許法導入後も同じように説明している。授業は、どのように考え、失敗しても直接責任を問われる謂れのない、ささやかな「公論の実験場」であり、意見交換、討論を経ることで、「自己の（被）教育経験の対象化、相対化」を試みようとする提案が続いている。これが、「アクティブ・ラーニングの視点」に適用することなのかどうかは、俄には判断できないが、ずっとそうしてきた。

ところが、今年度は問い直す日常が一変してしまっている。おそらく、もう以前の日常には戻らないだろうとも考えられる。異例のスタートに戸惑いながらも、筆者自身が経験のないことに動揺していることを率直に述べたうえで、ほぼ例年通りの問いを投げかけ続けた。

これを端的に言うなら、「私たちはどこから来たのか？ 私たちは何者か？ 私たちはどこへ行くのか？（D'où venons-nous ? Que

² 筆者自身はSNSからではなく、かつて教職課程の同僚だった岡田努教授（金沢大学）から話題として知らせていただいた。

³ この例文、another が効果的で、大学教員の一人としては思わずほくそ笑んでしまう。こんなことを断っているのは、前稿で既に触れたように、A大学でもB大学でも通常の学期より授業回数が2回少なく、申請書の表とは異なる運用にせざるを得ず、以下にそれを具体的に記しているからである。もっとも、「無理難題」ということでは、「教育実習」が各実習校で中止または短縮となった（ならざるを得なかった）場合でも、文科省から大学で規定の時間通りの代替措置を行うよう通達があったように、各授業の回数減少も、その回数内か、あるいは補講により内容を充足することが、言うまでもないこととして求められていたのだろう。筆者としては、与えられた条件でできることは行っていたつもりである。

sommes-nous ? Où allons-nous ?)」という、日常、あまり正面きって問うことのない問いである。日常を超えた想像力発揮の機会になるかもしれないが、決して楽ではない、面倒臭い問いである。

例えば、人類進化の道筋、現生人類（ホモ・サピエンス）の特質に関する多様な仮説を辿りながら、謂わば「絶滅危惧種」となった狩猟採集民⁴、その極みとも言うべきイゾラド（アマゾンの密林に住む文明社会と未接触とされる謎の先住民）の事例を通じて、あるいはまた、エンハンスメント、人の生をめぐる科学技術、医療の高度化がもたらしている「生と死の境界」の揺らぎについて考えることを通じて、たとえ僅かでもこれらの問いを解すことを試みている。

以下、学期の終盤に戦時下の記録映像を扱った授業から、日常が一変した今年度における「非常時の日常」についての考察をふりかえり、前稿の補足としたい。

Ⅱ. 記録映像から問う「非常時の学校」

A 大学「教育原理」（全 11 回）の第 8 回（6 月 18 日）、B 大学「教育原論」（全 12 回）の第 10 回（7 月 3 日）に⁵、戦時下の記録映像『戦

ふ少国民』の短縮版を視聴し、「生きる力と近代学校」について考え、意見交換する機会を持った。

この記録映像は、当時の表記にしたがって正確に記すと、文化映画『戦ふ少国民－完結－総蹶起篇（第四部）』であり、例年ならその全編約 40 分を視聴している。今年度はオンラインのため、放映機器の不備と接続環境の負荷から諦めかけていたところ、幸いにもネット上（YouTube）で検索して短縮版を見つけ、用いることができた。【歴史映像】戦争推進教育映画『戦ふ少国民』⁶というタイトルで、オリジナルにはないテロップがかなり加えられているが、この映画についての研究を参考にしたものであり⁷、オリジナルの趣旨が概ね伝わる「短縮」になっている（約 15 分）。戦時下当時の「文化映画」を「戦争推進教育映画」としているのも、戦意高揚を狙ったプロパガンダ映画であることは確かで、妥当だろう。

前稿に記したように、両大学の両授業とも、慣れないオンライン環境のお互いの負荷を考慮し、当初は、リアルタイムのオンライン授業は 1 時間を大きく越えないようにして、本来の残り授業時間は（小）課題レポート作成にあてて欲しいとしてはじめたが、学期終盤のこの頃に

⁴ 人類学者の尾本恵市は、世界の狩猟採集民の推定人口は約 71 万人、世界人口の 0.01% に過ぎず、野生動物の絶滅危惧種ばかりでなく、人間のそれにもっと関心を向けるべきだと訴えている（『ヒトと文明：狩猟採集民から現代を見る』ちくま新書、2016 年）。

⁵ 前稿で触れたように、筆者は恥ずかしいことに、東京オリンピックが延期となったことで B 大学の授業期間を実際より 1 週間後まであるものと誤認したまま、13 回ある予定の 10 回目、つまり A 大学と同じ終了の 3 回前の機会と思い込んで行っていた。終了までに受講学生（上級生）の指摘で気づき、事なきを得た。弁明は潔くないが、もし他の教員たちとの日常的な駄話ができていたら、もっと早く気づいただろうと思う。

⁶ <https://www.youtube.com/watch?v=ucbdkc3o8z4> (by toshi : 2017 年 8 月 2 日登録 / 2021 年 2 月 5 日現在視聴可能)

⁷ 後述するが、この映画について最も詳細な研究を行っているのは、本学教育学科の前田一男教授である。この短縮版では、末尾に（表記は正確ではないが）、前田教授の「西前国民学校軍人援護教育映画『戦ふ少国民』について」（横浜市史編集室『市史研究 よこはま』第 3 号、1989 年 3 月）を参考にした旨が記されている。

はオンライン授業だけで本来の授業時間ギリギリになっていた（A 大学は 105 分、B 大学は 100 分）。

この回の前半では、前の回までに課題とした「学制序文（学事奨励ニ関スル被仰出書）」、「教学聖旨」、「教育勅語」の解説をふりかえり、これを通じて戦前期の近代日本教育史を概説した。そのうえで後半では、「生きる力と近代学校」というテーマでこの映像を視聴し、3、4名のグループに分かれてのブレイクアウトセッション（20分）で、映像の感想を交えながら、このテーマや「もし自分がこの映像の学校の教師だったらどうする（振る舞う）か」について意見交換を行った。そして、「映像の視聴とブレイクアウトセッションでの議論を踏まえ、「生きる力と近代学校」について論じること」を課題として、（小）レポートを期日（次回の数時間前）までに LMS に提出するよう指示した。

映画『戦ふ少国民』の由緒

この授業回では、この映像について、視聴の前にも、課題提示の際にも、単にタイトルと、戦時下当時の学校を記録した映画であることしか伝えていない。実は視聴した短縮版の末尾にはこの映画についての詳しい説明書きがあるが（注7参照）、この部分の前で視聴をとめている。事前の情報は最低限にとどめ、まずは各人が映像から受ける印象を大事にして意見交換に臨んでももらいたいと考えるため、例年、そうしている。

翌週の回、「教育原理」第9回（6月25日）、「教育原論」第11回（7月10日）で、この映画の来歴をやや詳しく説明した。その際に主として依拠しているのは、今年度限りで本学を定年退職される前田一男教授の研究である⁸。文化映画『戦ふ少国民』は4部作で、前田教授の研究は、その制作経緯を明らかにする録画台本や当時の新聞記事、舞台となった国民学校の校長が著した懸賞当選論文等、関連資料を詳細に収め、4部作の全体像に論及したほぼ唯一の研究である。

録画台本によると4部作は以下のような構成となっている（表記は台本のまま）。

第一部 夏ノ巻

鹿児島懸前濱国民学校 南国漁農村

第二部 秋ノ巻

愛知懸八幡第一国民学校 関西小都市

第三部 冬ノ巻

山形懸大曾根国民学校 北国農山村

第四部 春ノ巻

横濱市西前国民学校 関東大都市

電通映画社製作部が1943年から翌44年にかけて製作、構成は西尾佳雄、撮影は藤田英次郎、軍事保護院が後援指導と記されている。製作の意図（全編）は、「戦ふ少国民の実像（実践挺身）を描いて軍人援護精神の高揚に資すること」とされ、紛れもないプロパガンダ映画である。

先述の通り、視聴した短縮版のオリジナルは正確には『戦ふ少国民－完結－總蹶起篇（第四部）』で、4部作完結となる末尾には、天祖降

⁸ 前田一男編集・解説『資料 軍人援護教育』（野間教育研究所、1999年）を参照。この記録映画の先駆的な研究としては、阿部彰『人間形成と学習環境に関する映画史料情報集成』（風間書房、1993年）に詳しい言及がある。

臨の聖地、宮崎市八紘基柱前広場での「闘魂振起戦捷祈願大会」の様子が収められている。その製作意図は次のように記されている。

学校の教室で習得するいろいろな智識や技能を、そのまままちの教室にうつして、軍人援護の実践に挺身する子供たちと、一町一丸總蹶起運動に寧日なき教職員の敢闘ぶりを紹介して、決勝の年に於ける都市国民学校のあり方を教え、最後に『戦ふ少国民』全篇の結びとして、天祖降臨の聖地日向（高千穂）の八紘台上に「みたみわれら、大君にすべてを捧げまつらむ」と全国の少国民に誓わせる。

第4部は「春ノ巻」となっているが、当時の新聞記事によると、「闘魂振起戦捷祈願大会」が行われたのは1944年4月14日で、前田教授はその他の資料も勘案し、第4部撮影時期を1944年1月から4月と推測している。上級生の銀輪部隊が靖国神社に向かい、宮城遥拝を行うシーンや、形式としては戦後とあまり変わらない全校集会、運動会のシーンなどが印象に残るが、撮影の詳細を示す資料は見つかっていないようである。

全編の結びは、宮崎市内の男女中等学校1、2年生、国民学校3年生以上、海洋少年団儀仗隊等、17000余名の「少国民」が、軍事保護院総裁の本庄繁陸軍大将の号令に従い、一斉に「オキヨ」と三唱し、絶叫しながら駆け出していく場面である。あまりに露骨なプロパガンダで、大会の名称ともども、ただただ慄然とさせられる。高さ36.4mの八紘基柱（八紘台）は、戦後は平和台公園内に聳える「平和の塔」となり、一旦削除された正面の八紘一字の文字も復

活して現存している。この大会を指揮した本庄大将は、戦後、1945年11月に戦犯指名された後、壮絶な割腹自決を遂げた。

台本には、「少国民」について「明日の国力の源泉、次代の皇国民」、「国民学校」について「決戦下、少国民にとって必勝のための唯一の錬成道場、軍人援護精神涵養の場（前線将兵の士気を鼓舞し、後顧の憂なく尽忠奉國の誠を致さしめる）」と説明されており、「近代戦は総力戦であり、供給と生産が鍵で、「教育即援護、援護即生産」がスローガン」と明記されている。

舞台となった国民学校は、1941年4月1日に旧来の小学校令を全面改正した国民学校令に基づいて発足し、初等科6年、高等科2年義務制で、ただし初等科終了後、中等学校への進学が可能であった。映像には上述の銀輪部隊など、高等科の生徒もしばしば登場している。

後援指導の軍事保護院とは、1938年に内務省から分離した厚生省が、翌1939年に設置した外局で、傷兵保護院と軍事援護部の合併により成立し、行政と療養所、職業補導所等の諸施設運営を担っていた。戦局が長期化するなかで、実際問題として傷病兵、遺族、出征軍人家族への援助の必要性は増大していた。短縮版は学校内の場面が中心で、少国民の地域での奉仕活動の場面は残念ながら大幅にカットされているが、授業では、男手を奪われ、子どもたちが地域の労働力となるほかはなかったことを補足した。

軍人援護教育は国策として推進され、映画製作意図にも窺えるように、まさに家庭・地域と一体になって、あらゆる学校活動を軍人援護のために編成した教育実践である。軍事保護院

は1943年にその模範校150校を表彰しており、この映画の舞台はいずれも表彰校であった。模範校は、「児童に義務ではなく、自発的な感謝・援助の精神を起こさせることに苦心し、教えることよりも、自発的集団訓練を重視した」という。そのような国策映画であるが、教職員も子どもたちも台本通りの演技をしているわけではない。「寧日なき」非常時を日常として生きていたわけで、映像状態は良好とは言えないが、戦時下の映像による貴重な記録である。

この記録映画のフィルム等は、戦後すぐにGHQに没収され、1977年に返却されてから、ようやく研究者にも知られるところとなった。第4部は、NHK番組「昭和史回顧録」の「戦時下の少国民－昭和19年、横浜」放映（1980年7月2日）を契機として、西前国民学校卒業者を中心に、没収された以外のフィルム、資料の調査が行われ、すでに故人であった戦時下当時の三薺三郎校長が、子息に「公表できるまで保管せよ」と遺言を残して秘蔵していたフィルムと台本が公にされた。その後、寺崎昌男本学名誉教授（東京大学・桜美林大学名誉教授）や前田教授ら日本教育史の研究者たちが、研究調査・教材用として台本のコピーやフィルムのダビングテープを入手した⁹。筆者は大学院生の頃にこのテープを視聴させてもらい、本学に着任した際、当時は同僚の寺崎名誉教授のご厚意でダビングさせていただき、以来、ほぼ毎年、教材として用いている。

受講学生たちの考察（課題レポート）

前稿で述べたように、例年ならば、授業時間内にまず各人が課題（小）レポート作成（肉筆）に取り組み、その後、直ちに数名のグループで意見交換を行い、コメントを記し合って、コメント付きのレポートを提出する。そして、次の回には数名のレポートを匿名で紹介しながらふりかえっていた。もはや旧時代的な授業方法だが、肉筆ならではの息遣いがそこにはあった。

オンラインでも、Zoomのブレイクアウトセッションではチャットに添付してファイル交換を行うことが可能である。しかし、今年度初めての試行錯誤ではそこまでの習熟は困難で、またこれを試みると接続環境の負荷からかZoom落ちをする受講学生が続出したため、ブレイクアウトセッションは意見交換のみの時間とし、課題は筆者にとっては不本意だがホームワークにした。提出期限は一応、次の回の数時間前としたが、毎回のことなので、なるべく早く提出するよう呼びかけた。

すると概ね二、三日後までにかんがりの提出があったので、全員分からはではないが、例年同様に数名選び、匿名化してレポート例集を作成し、次の回に用いる教材としてLMS上に提示した。提出期限ギリギリまで粘り、この教材、つまり同じ受講学生のレポートを参考にして提出する（参考にしたと記す）受講学生もあったが、それはそれで、評価の公平性といった観点から問題視するようなことではまったくなく、進行中

⁹ 前田教授は、横浜市史編集室で電通映画社の元社員から提供された社内用の録画台本等を入手し、注8の文献を著した。前田教授の調査によると、4部作のうち、第2部（秋の巻）は国立近代美術館フィルムセンター、第3部（冬の巻）は山形県立博物館教育資料館に所蔵されているが、最初に制作されたはずの第1部（夏の巻）は、上映記録が残っているものの、その存在をまだ確認できていないという。

の授業担当者の裁量次第と考えている。

『戦ふ少国民』を教材とするこの一回の授業で、例年なら視聴約40分、小レポート作成約15分、意見交換・コメント記述約20分、計約75分用いるところ、今年度春学期は視聴約15分、ブレイクアウトセッション20分の計約35分で、40分ほど節約した。例年、他にも映像視聴を多用していたので、その省略は無念であったが、授業回数が2回少なくなっても、例年と同様の内容をどうにか学期内に組み込むことができた。

映像を用いた課題は、例年、受講学生の筆が比較的よく進む。オンライン授業でも同様の傾向で、ホームワークとした分、長文のレポートが多くなった。

以下、小論には不適切な長い引用になるが、比較的早く提出され、授業内で教材化したレポートから数名、抜粋しておきたい。全文ではなく適当に省略しながらも、原著者の文意を大きく損なうことなく紹介することで、ブレイクアウトセッションの様子や受講学生たちの考察を僅かでもふりかえっておきたい（下線は引用者）。

① 私が映像を視聴して最も驚いたことは、「一億一丸」の基盤が国民学校にあったことだ。「生きる力と近代学校」のテーマで言えば、戦時中は国民学校が子どもたちに「生きる力」を与えていたと言える。これは、国民学校が子どもたちに「戦争に勝つ」という目的意識を植え付け、その結果子どもたちは戦時下で求められる規範を内面化し自分で自分を鍛錬しているような状態になっていたと考えられ

るからである。……戦争に対する疑いや恐怖が払拭され、総動員体制が構築されていたのだと思う。……

教師の立場から考える。もし自分が当時の国民学校の教師だったら、間違いなく戦争に協力していただろう。戦争の勝利に貢献できる人材の育成という目的が、当時の教師に「生きる力」を与えていたと考えられるからだ。教育の目的に関して教育者・被教育者の間でこれほど明確に合意が成り立っていた時代は、他にないと思った。ただ、当時の教師は画一的だったのは確かだが、現在の教師は果たして多様と言えるだろうかという意見がブレイクアウトセッションで出た。というのも、いつの時代にも教師には一定レベルの共通の素養が求められると思われるからだ。初回の授業で開放制という教員養成制度のメリットについて考えた際、多様性がキーワードの一つとなったが、その対極にある共通性についても考える必要があると感じた。これは、人間の画一化・多様化というより大きなテーマに関わる問題のようだ。（A 大学1年）

② 戦時中の教育の状況を描いた映画を視聴し、衝撃を受けた。教師は生徒に国に命を捧げることの光栄さ、日本国民全員が団結して戦争に挑むことの大切さを伝え、子供たちを洗脳していた。……教師側も皆が本当にやりたくてそういった教育をしていたのかについては疑問を感じる。教師側も国に監視され、下手な行動は取れない。戦争の愚かさ、惨めさを知っていてもそれを生徒に教えれば反逆者として扱われ、自分や家族に冷たい視線が向けられることもあるだろう。日本人は

「一体感」に弱い。……国民同士でも監視し合い、反対少数派は排除される。国民は建前として戦争に協力しつつも闇市で生活用品を買ったりと、本音と建前を分けている。これらは非常に現在のコロナ社会と似ている。人々は緊急事態宣言が出されると外出して遊んでいる子供を見つけて警察に通報したり、外出している人に冷たい視線を向け、排除しようとする。また、建前では自粛しているように見せつつ隠れて遊びに行ったりし、外出したい気持ちを抑えきれない人もいる。今でもコロナ状況下での正しい姿勢や動き方は皆わかっていないし、混乱をどう戻すかは専門家も模索している最中だが、一つ言えるのは混乱の時こそ少数派を過剰に非難してはならないということである。私がもしその時の教師だったら、戦争主義をそのまま教えるのではなく将来に生きることを教えたい。戦争に勝っても負けても生徒たちには将来があるのだから、その時に使えるよう基礎教育は施したい。また、外に出たら協力的な姿勢を見せるべきだが、内面では戦争がどのようなものなのかしっかり分かっておいてほしい。物事を相対化し自分で客観的に考えることは非常に大切である。しかし、実際にはこのような教育はできないかもしれないし、すべきでないかもしれない。……

結局、このような状況でどう教育すべきかについて考えをまとめることができなかった。……

過ちはこれからも起きるだろうが、それに人々が個人的意見を言えるような民主主義を広く浸透させていくことが大切だと思った。

(A 大学1年)

③ 映像に登場した戦時期の学校の姿は、明治5年の学制序文が掲げた教育のあり方の完全な敗北であるといえる。学制序文が掲げたのは、個人が生活していくための「生きる力」を養うための実学であり、個人が自らの負担によって主体的に行う学習であった。国家(江戸時代までの藩)のために学ぶという姿勢は否定されていた。これに対して戦時期の学校で行われたのは、すべてを国家(もちろん大日本帝国)のために捧げる教育であり、生きる力を与えるどころか、命まで国家に捧げることを要求するものである。皮肉なまでに正反対になっている。……

……当時とは違って多少逸脱しても教壇を追われることはないから、教員個人の選択の余地がある。

私としてはできる限り、アイヒマンになって盲従するのではなく、自らの考えを子どもたちに伝えたい。教科書と異なる意見があること、先生によって言っていることが違うことを知って、子どもは教科書も先生も絶対的なものではないことに気づき、自ら考え独自の意見を持つようになるだろう。そうやって自ら考える力こそが「生きる力」ではないか。(A 大学修士1年)

④ 私がこの文化映画を見て、心の底から「お国のため」を思って行動することになんの疑問もなく、あんな小さな子供のうちからそのような思想を持たされ、教育というよりむしろ洗脳だと思い、恐ろしくなりました。しかしブレイクアウトセッションで現代に通ずるところがあるという意見を聞きハッとしまし

た。自粛要請が開けたいまま外出することはなんとなくはばかられ、マスクをせず外に出たものなら批難の眼差しを感じるようになります。隣組のように互いに監視しあい守れていないものを咎めるという雰囲気があります。当時は今とは比にならないくらいこの同調圧力が強かったとは思いますが、当時の考え方はまるで今の私たちと違っていただけではないということに気づけました。実際、何が正解かはその当時わかりません。自分が心の底から正しいと思って教えていた当時の教員もいたかもしれません。正しいと思うことを教えることは当たり前のことです。しかし結果的に間違った考えを押し付けていたことは事実であり、戦争賛美に加担したことも事実です。このような事態を防ぐために考えは多様であること、自分の考えが間違いである可能性を考慮することを常に念頭に置いておく必要があるということをブレイクアウトセッションで共有しました。……

……子供たちの未来のための教育がこれからも行われ続けるべきだし、それは社会や大人の責任だと改めて感じました。(A 大学 2 年)

⑤『戦う少国民』をみたあとのブレイクアウトセッションでは、国民が洗脳されていて異様な印象を受けたということと、そうは感じても実際に自分があの場に教員としていたら抵抗はできないだろうという意見が一致した。しかしその中でも、単に国家による規制や罰則を恐れて抵抗できないとする考えと、周囲の状況に圧倒され、流されて、抵抗しなければならぬという意思さえ持たなくなる

のではないかという考えの二つがあった。この二つの考えは対立するものではない。これは、当時の思想統制が、法のみならず国民の道徳にまで及んでいたことを示していると考えられる。……

……ここで、学校は生徒の発達にどこまで干渉すべきかという問いが生まれる。戦時中のように思想まで全国民で統一されてしまえば、国民は個人の意思に基づいて生きているとは言い難いからである。しかし、知識や技術を教えるだけが学校の役割ではないだろう。……

……現代の学校も、初期の近代学校が個人の独立と国家の統一を同時に目指したのと同じように、両立困難な役割をこなしているように思える。(B 大学 1 年)

⑥ 今回の講義を視聴し、私達はブレイクアウトセッションで実際に当時あの状況にいたらどうしていたかを話した。グループでの意見としては、やはり当時あの状況にいても中々周りとは異なる対応を取る事は難しいだろうという意見が大半であった。私の意見も同じで、当時の状況を踏まえると周囲に対して異を唱えるのは難しいだろうと考えた。……

又、生きる力という点に関しては、私は動画を視聴して当時の学生達の必死さから生きる力を感じた。当時の学生達はあの様な環境の中で各々が生きる力を発揮していたのだと思った。……今の価値観からすると、竹槍や薙刀を教える事は学校で行うのに相応しいのだろうかという疑問がある。勿論現代でも、学校には体育の様な授業もあるので、適度に

行うのであれば問題はないのかも知れないが、竹槍や薙刀を教える事の比重が高まってしまう事は本来の意味での学校という役割から逸脱しているのではないかと思った。それは、学校は実学だけを教える場所なのかという問題とも繋がっていると思う。私は、学校は実学だけを教える場所としてだけでなく、日常生活に直接的に役立つ事がなくとも学園の入り口として、生徒達の見識を上げる為にあるべきであると考えた。今日では当たり前のように存在している学校であるが、その学校が前近代の学校とは違う近代学校として如何にあるべきか私達は今一度考える必要があるのかも知れない。(B大学3年)

⑦ 私は以前、学校ではだしのゲンの漫画を読んだことがありその際に戦争に反対すると非国民として追放されてしまったり、戦死することが国のためとして評価されたりしている戦時中の様子を知った。そのため、動画の時代には戦争に対して反対の意見を持っても人前で表現することはできなかったと思う。

ブレイクアウトセッションでも、「戦争は耐えるもの・勝つものとして教育するだろう」、もしくは「そもそも終わりが見えない戦争自体が正しいものであるか、考える心の余裕がなかったのではないか」といった、戦争に反対することはできなかったのではないかといった意見で一致した。しかし、当時の人々の考えと現在の人々の心情には違いがあるのかという点で考えてみると、表に出していない、もしくは出せなかっただけで同じ人間として戦争に対して抱く思いに違いがない

ように思われる。違うのは自分の思いを主張できる環境にあるかどうかであると思う。何事も最初は勇気と意思がいるが、自分を強くもち行動する必要がある。こうした際に必要な個人の生きる力や多様性・自由を育てることが教育の一番の目的であると思う。……

……多くの人が人間らしく意思をもって生きるために必要な教育を与えられる学校のある国づくりが大切となると思った。(B大学1年)

「もし自分が映像の学校の教師だったらどうするか」、「あの教師たちの同僚だったらどうするか」という問いかけに対しては、これまでしばしば、「それは今の自分があの時代にタイムスリップしたらということですか、それとも、あの時代に生まれていたらということですか」との質問を受けることがあった。尤もな質問だが、「どちらと考えてもいいです、同じことではないですか」と答えてきた。今年度はそうした質問は両大学ともなかった。無理難題と言われれば無理難題であり、映像の当事者を無理やりでも想像してみるという思考実験に過ぎず、これを表現するのは困難だろう。

日常が一変した、異例の状況の今年度は、むしろここにいたるまでの授業の流れがよく踏まえられ、「生きる力と近代学校」というテーマが有効に働き、意見交換の趣旨も活かされたレポートが多かった。引用はそのほんの一端で、贅言は不要だろう。

ただ、すでに前稿で言及し、本稿冒頭でもふりかえったように、上級生が8割を占めるA大学「教育原理」の場合、ブレイクアウトセッ

ションでは時間ギリギリまで議論が続き、レポートの平均字数は優に 1000 字を越えていたのに対し、新入生が多数の B 大学「教育原論」の場合、この頃には明らかにオンライン授業疲れの様子が見られた。ブレイクアウトセッションの各ルームを見回ると、数分で沈黙の時間になるグループが多く、さらなる議論を呼びかけてみても、みんなの意見は一致したとして、ただ時間が過ぎるのを待っていた。レポートも数百字以内のものがほとんどであった。

その時代に当事者として身を置いてみれば、危険を冒してまで異を唱えることなど困難であり、そもそもおかしいと思うことすらないかもしれない。そう想像するのは当然としても、例年ならば、両大学とも、表向きは従うふりをして、密かにあらゆる手段で子どもたちに生きるよう伝えたい、生きる術を教えたい、とする趣旨のレポートが多々見られた。今年度の B 大学は、例年に比べ、意見交換を経ても、その時代にはその時代に合わせて生きるしかないという見解で一致した、それ以上は考えても仕方ない、といった淡泊な様子が顕著なようで気になった。とは言え、翻って現在の学校は、自分たちはどうなのかを考える趣向は窺えたので、疲れた様子の中でも課題として控えなかった意味はあったと思われる。

Ⅲ. 過剰な応答と今後の課題

思いめぐるままの応答

記録映像の視聴、意見交換を経た課題レポートを数例抜粋紹介し、ごく簡潔に講評した後、すでに記した、この記録映像の来歴を説明しながら、「無理難題」への授業担当者としての応

答を行うようにしている。同内容の問いでも、当然のことながら応答は毎年変わる新鮮な営みである。先に贅言不要と記したように、学生どうしの討論とその紹介だけで十分なのかもしれないが、無理難題を投げかけた責任として、限られた授業時間のなかでの、まとまらないままの率直な足掻きでも、受講学生たちの課題レポートを得られたが故の筆者自身の思考の手がかりをやや過剰に述べている。

それは偏に、非常時にどうコミットすることが可能なのか、歴史から学ぶことはあり得るのかということに関わっている。

『戦ふ少国民』に登場する教職員たちは、もうおそろくほとんどの方が鬼籍に入られただろうが、国民学校世代のあの子どもたちは現在、80 歳代でまだまだ存命中の方も少なくないだろう。今はもうすっかり遠い昭和の一コマ、誰も生きる時代を選べない。後の時代が何かを断じるのは、不遜、不適當には違いない。

全校生を前にして、「戦争は是が非でも勝たなければなりません」、「鬼畜米英何者ぞ、ただ撃滅あるのみ」、「我々は必ず勝つ」と堂々と絶叫する三嘴校長は、記録映像を遺言までして秘蔵させ、死してなお歴史の証言をしている人物であり、当時の地域社会の名士だっただろう。その時代に深くコミットするのも、潔い生き方だろう。歴史的運命として、誰かがその責任を負わなければならなかったということかもしれない。

だが、あの西前国民学校は軍人援護教育の模範校であり、三嘴校長が懸賞論文に応募して当選し注目を集めていた。必ずしも当時のあたり前、「(全国) 普 (くその) 通 (りの在り様)」

とは言えない。映像では大きな鉄筋校舎と大勢の機敏な動きの子どもたちが印象的だが、撮影の翌年には空襲で木造校舎が焼失するような厳しい過ぎる時代状況にあった。それでも、戦時体制への「適応過剰」であり、それ故に歴史（を生きる人間）への「適応不足」と見ることができなくはない¹⁰。

教師と子どもたちとを同じように考えることはもとよりできない。権力、能力、権限を有する者の責任をどう考えるか。

為政者について考察し始めたらキリがないが、例えば、科学者はどうか。やはりキリがないが、どんなに優秀な功績を残した人であったとしても、ABC兵器、大量殺戮兵器の開発、ないしはそれへの加担を免罪することなど決してできない。例えば、国家総動員体制下の芸術家。ペン部隊の作家たち、従軍画家や戦争協力の音楽家たちの作品、その時代前後の名声を、今日、あらためてどう評価するか。

春学期とちょうど重なるタイミングで放映されていた、NHK「連続テレビ小説」（朝ドラ）第102作は『エール』、主人公のモデルは古閑裕面であった¹¹。恥を覚悟で、「くーも、はーわきい」と歌うと、すぐさまチャットに「栄冠は君に輝く、ですね」との反応が記される。ごく最近まで高校生であった彼女、彼たち。今年度は中止であったが、高校野球に少しでも親し

んだ者なら、この古閑のメロディは染み込んでいるだろう。ドラマはドラマ、モデルはあくまでモデルとしても、そのドラマに頻出する実在の古閑のメロディは確かに耳に馴染みやすい。「露営の歌」などはどこか哀愁を帯び、単なる戦意高揚歌のように聞こえないが、「戦時歌謡」なるジャンルでその地位を確立した、確信的な戦争協力者には違いない。だが、戦後は広島でも長崎でも心に響く鎮魂歌を作りあげた。数々の多彩な名曲、数え切れないほどの校歌、社歌を手がけた、昭和の大作曲家である。その生涯は、音楽を通しての「エール」を貫いたということになるのだろうか。

教育分野との関わりでは、例年、下中弥三郎に言及する¹²。大宅壮一の『昭和怪物伝』（1957年）にあげられた一人であり、為藤五郎には「遊動円木」とあだ名された。小学校の代用教員を経験し、苦学者が重宝した日常小百科『や、此は便利だ』（「や便」）出版を契機に、平凡社を創設する。農民運動、労働運動に尽力し、大正期には教員組合「啓明会」を結成し、学習権を生存権として強調する『万人労働の教育』（1923年）を著しながら、戦時下には大政翼賛会発足に奔走し、超国家主義的主張を繰り広げる。戦後に公職追放となり、これを解除されると、平和運動に携わった。激動という形容すら色褪せる人生である。

¹⁰ このような見方をする発想のベースには、「学校適応過剰」、「学校適応不足」という竹内常一氏の問題提起がある（『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会、1987年）。まさしく少国民世代で、筆者が畏敬してやまなかった氏は、昨年9月、老衰により静かにその生涯を全うされた。

¹¹ 授業で古閑に言及した「教育原理」第9回（6月25日）、「教育原論」第11回（7月10日）の頃は、『エール』はパンデミックのため撮影が中断された影響でちょうど放映が中止になる頃（正確には6月29日以降、9月11日の再開まで、初回からの再放映）であった。「栄冠は君に輝く」は再開後に取りあげられていた。

¹² 最もコンパクトな概説書として、中野光『下中弥三郎—その人と思想—』（図書月販、1971年）参照。

先に掲げた受講学生のレポート③に先取りされているが、毎年、ハンナ・アーレントによるアイヒマン裁判の考察を歴史の教訓として必ず取りあげている。思考停止がどうしてもなく「凡庸な悪」を蔓延らせてしまうことについては、可能ならば極限状況、とりわけ強制収容所のゾンダー・コマンド (Sonderkommando) と対比的に考えてみたいが、まだまだそのような想像力も勇気もない。

実戦となる以前に、人間の自由が損なわれ、人間性が破壊されてしまうのが戦争であり、戦時下、国民は単なる補給源、石ころ扱いであった。いつから非常時となるのか、いつの間にか異常な事態が進行し、当事者にはわからないのかもしれない。今現在の「緊急事態」と非常時は、単に法令上の用語の問題ではなく、明らかに異なるだろうが、今にいたる少なくとも数年間、異常な事態が進行しているようなことはないだろうか¹³。反省と批判的思考の力を養い、保つことを、いかに困難でも模索しないと、人間はどうしようもない存在と言うしかなくなってしまふ。

大学生になったばかりの頃、学生主催のシンポジウムで定年間際の老教授が学徒兵としての経験を問われ、「直接体験を伝えることなどできない、だから、これを思想化することが重要と考えている」と応えたことがずっと頭から離れないでいる。もうその時の老教授と同じ年頃になってしまったが、何がどう思想化されてき

たのか、思想化するとはどういうことなのか、正直なところ、今でもよくわからない。

過酷な経験の想起は苦しいだろうが、あまりにも語られないまま時間が経ち過ぎたのではないか。日本国民は一体感に弱いばかりではなく、水に流し過ぎではないか。あまりに無残な、夥しい犠牲を強いられたあの戦争から、何か歴史の教訓を得ようにも、もう生き証人たちには時間が残されていない。後付け的な批評、反省を躊躇する／し過ぎる必要はまったくないと思う。「死者」(たち)との共闘はときに悲慘を招くかもしれない。だが、「死者」を忘却することは、人間性の、人間が歩んできた道のりの後退にしかないのではないか。たえず、「公正」とはどういうことなのか、今現在の歩みは「歴史の批判」に耐え得るのかと問うことを忘却しないでいたい。

このように駆け足で応答し、とりあえず、次のように締めた。受講学生には、いじめに苛まれてきた者も、傍観者であったことを恥じている者もきっといるだろう、と恐れながら。

同調圧力に抗するのは困難だろう。しかし、一体感に高揚し、時流に正面からコミットするばかりではなく、もし運が良ければ、これをかわす、避けることも、決して恥ずべき生き方ではない。勢いに加担しない姿を密かに見つめる次世代がいるかもしれない。

¹³ 緊急事態であれ、非常事態であれ、emergencyであり、有事に違いないが、戒厳令を想起させる後者を法令は基本的に避けている。本稿執筆時は、COVID-19の感染拡大による二度目の緊急事態宣言中で、さらに延期が決定されたところで(東京都等、3月7日まで)、そこにミャンマーのクーデター、非常事態宣言発出のニュースが飛び込んできた(2月1日)。

適応過剰と適応不足：オンライン授業評価とこれから

戦時下について、学校教師について、当事者となったつもりで考察するという無理難題の後には、授業期間は僅かしが残っていなかったが、戦後の教育改革などを急ぎ足で概説し、どうか今年度春学期、初めてのオンライン授業を試行錯誤し終えた。

異例の全面オンライン授業化のなか、A大学、B大学とも、すっかりルーティンとなった授業評価アンケートを春学期は実施しないと英断(?)した。だが、A大学の「教育原理」では、総括課題レポートの末尾(欄外)か、あるいはLMSの任意コメント欄に、かなり多くの受講学生がコメントを寄せてくれた。「対面がかなわなかったのは残念」、「一度は対面でお会いしたかった」など、仮にお世辞だとしても、例年の強いられた、何の味わいもない形式的段階評価、平均数値とはまったく異なり、任意の自発的な記述は、教師にとって何よりの報いであり、次につながる望外の励みとなる。一部、紹介しておこう。

オンラインでの講義で、毎時間のグループワークは難しいところもありましたが、しっかりと考え、多くの意見を聞くことができて、とても有意義な講義でした。また、毎回の課題も当たり前で過ぎてきたことを根本から問い直すものが多くハードでしたが、深く考えること、そして文章化することで力が付いたなと感じます。4か月間ありがとうございました。(4年生)

一学期間ありがとうございました。教育学の「答え」を与えられるのではなく、ある考

えが生じた過程を追体験していく授業は興味深く、面白かったです。(3年生)

初め、「人間とは何か」と問われて、その問いを教職科目の授業で扱うことに何の意味があるのだらうと思いましたが、回を重ねるにつれ、教師を目指す者としてのみならず、人間としてその問いを問い続けることの意味が分かるようになりました。・・・成績云々の話は抜きにして、この授業は今学期の授業の中で一番面白く、ためになったと思っています。答えの無い問いを考えるという大学生ならではの楽しみも味わえました。教員免許取得への第一歩として、大学生としての第一歩として、教育原理を受講して本当に良かったです。ありがとうございました！(1年生)

振り返ってみると、4月のまだオンラインに慣れていない時から学生のために手のこんだ資料やブレイクアウトセッションで他の人との意見交流を大切にする授業運営をしてくださって感謝しかありません。この教育原理の授業はオンラインで誰にも会えず息苦しい時間の中での憩いの場でもありました。・・・僕の大好きだった教育原理の授業が今日で終わるのは残念ですが、教員になれるようにこれからも教職系科目を中心に幅広く学んでいきたいと思います。本当にありがとうございました。(1年生)

これに対し、B大学では総括課題への余分なコメントはほとんどなかった。この違いを前稿では学年構成の違い、オンライン授業疲れによるものと推測したが、ここまでふりかえってみて、単純にそうではないことに気づかされる。

箇条書きのパワーポイントファイルに即して語ったが、整理されないままの無様な、暑苦しく取られかねない授業担当者の試行錯誤は、やはりすぐに慣れたつもののオンライン環境への適応過剰であり、それ故に適応不足と言える。A 大学では、授業担当者の試行錯誤を眺めながら、自らも未整理を愉しむ受講学生がいて、受講学生どうしの好循環を生じさせることもあった一方で、B 大学では、未整理は単にオーバーワークを促進し、受講学生に何ら寄り添うものではなかったと考えられる。過ぎたるは猶及ばざるが如し、子どもの頃から習い知っているはずの古の賢者（孔子）の言が沁みる。

これからは、それでも事前準備、教材研究はさらに過剰に続けながら、より丁寧な整理で受講学生が多様な手がかりを得られるよう心がけたい。何のことはない、授業担当者として当然の初心にかえり続けるのみである。

映像から当事者を想像する試みは続けるとしても、戦前、戦時下、戦後を生きた学校教師の手記なども参考資料として加えた方がいいのかもしれない。教え子たちを戦場に向かわせたことを悔やみきれず、恥じ尽くせず、教壇を去った者もいれば、「散々、鬼畜米英って教えておいて、今度は民主主義、いい加減な野郎だ」と、戦後を生きる教え子たちに小さくない影響を与えた者もいる。

戦時下にいたった過程については、いかに授

業時間が限られていても、いくらか詳しく説明する必要がある。例年と同じく今年度も、「戦前の教育勅語体制のもとでの学校教育への批判、改革の試みとして、昭和初期に新興教育運動が農村や都市労働者のもとで起こったが、弾圧されていった」とレジュメで一行、一言だけ触れた。これでは、戦時下の教師たちが置かれた状況、同調圧力への想像力は、ごくありきたりにしか働かなかったとしても仕方がない。国民学校の前史として、治安維持法、二・四事件などの教員弾圧、二・二六事件、その後の翼賛体制という、生命が危険にさらされ、人生が蹂躪される体制への流れを押さえておくべきだろう。教員弾圧事件の研究も、前田教授の真骨頂である¹⁴。

『戦ふ少国民』のような当時の映像ではないが、例えば、YBC 山形放送制作のドキュメンタリー番組『想画と綴り方～戦争が奪った子どもたちの“心”～』¹⁵は、治安維持法施行下、子どもたちに生活を見つめさせる小学校教師への、特高の陰湿な拷問を描き、教育を洗脳の妨害と妄想する権力を炙り出させている。取材対象となった学校、山形県東根市立長瀬小学校は、戦時下当時は北村山郡長瀬村国民学校で、『戦ふ少国民』第三部（冬ノ巻）の舞台、山形県大曾根国民学校（東村山郡大曾根村国民学校）とともに、山形県下で軍人援護教育の模範校として表彰された4校のうちの1校であった¹⁶。こ

¹⁴ 前田教授の労作（解説）として、『「長野県教員赤化事件」関係資料集』全3巻（六花出版、2018年）がある。

¹⁵ 2019年2月11日放映。公益財団法人民間放送教育協会（民教協）の年に一度のスペシャル番組の第33回（2019年）に選出された。教壇を追われ、戦後も復帰することのなかった、国分一太郎の若き日を生き生きと想起させる、秀逸な作品である。

¹⁶ 青木章二「農村部における軍人援護教育の成立と展開- 山形県大曾根村国民学校の事例を中心に-」（『山形県立博物館研究報告』26、2008年1月31日）参照。

の番組も補足として用い、可能な限り考察を広げたい。

これまで授業では一度も言及してこなかったが、「非常時の日常」を生きるということでは、アニメーション映画『この世界の片隅に』¹⁷を大きな契機として、若い世代（高校生）による戦争伝承の試みが話題にのぼるようになっていく。NHKの投稿募集「#あちこちのすずさん」なども念頭に置いておかなければならないのかもしれない。

少国民、戦争と教育に関わっては、同じ敗戦国（先の大戦の同盟国）のヒットラーユーゲント（Hitlerjugend、ナチスドイツ）やバリッラ（Balilla、イタリアファシスト党）¹⁸との比較検討も見失うことのできないテーマである。そもそも「少国民」は、おそらくヒットラーユーゲントが用いた Jungvolk に由来する語だろう。いずれも、独裁国家に子どもたちを強制動員する制度、組織であるが、戦局が悪化すると、子どもたちを直接、戦場に向かわせるようになる。皇国日本は、志願兵や徴兵年齢を下げての少年兵徴用ばかりではなく、沖縄では防衛招集として子どもたちに破滅的なゲリラ戦を強いた¹⁹。

先に触れたように、模範的国民学校は少国民

の自発的服従を調達することに腐心していた。だが、少年兵を利用する側から見れば、子どもは明日の戦力予備軍というより、従順で洗脳されやすく、強制が容易な故に、むしろ格好の利用材料、即戦力となる。

子どもたちを兵士として戦闘に利用することは、残念ながら第二次世界大戦後もやむことはなく、現在なお、「この世界の片隅に」続けられている。18歳未満を子ども（child）と定義する「子どもの権利条約」（1989年採択）は、まず15歳未満の軍への徴用を禁じたが（第38条）、さらに「武力紛争への子どもの関与に関する子どもの権利条約の選択議定書」（2000年採択）で18歳未満の子どもの強制徴兵を禁止し、これが国家以外の勢力にも適用されることを明示した。歴史的検証を踏まえるなら、現状は日本にとって決して他国事ではなく、戦争のない世界を築いて行く動向に率先して貢献することも可能なはずである。

世界がパンデミックに見舞われている今、戦闘地域、紛争地帯の子どもたち、そこから逃れようとする子どもたちは、支援困難な、より厳しい状況に陥らされている²⁰。困難を強いられている人々が見捨てられていく一方、気の早い

¹⁷ 監督は片渕須直で、2016年11月12日公開。制作資金をクラウドファンディングで集めたことも話題となり、数々の賞を受賞し、異例のロングランとなった。原作は2007年1月から2009年2月まで『漫画アクション』（双葉社）に連載された、この史代の同名漫画作品。原作者は、『誰もかれも』の『死』の数で悲劇の重さを量らねばならぬ『戦災もの』を、どうもうまく理解出来ず、この作品で、「戦時の生活がだらだら続く様子を描く事」にし、「そこにだって幾つも転がっていた筈の『誰か』の『生』の悲しみやきらめきを知ろう」としたという（コミック『この世界の片隅に（下）』『あとがき』、双葉社、2009年）。

¹⁸ バリッラについては、藤澤房俊『ムッソリーニの子どもたち－近現代イタリアの少国民形成』（ミネルヴァ書房、2016年）参照。

¹⁹ NHKスペシャル取材班『僕は少年ゲリラ兵だった－陸軍中野学校が作った沖縄秘密部隊』（新潮社、2016年）参照。

²⁰ 例えば、2018年ノーベル平和賞受賞者でコンゴの医師デニ・ムクウェゲ氏が、コロナ禍で混迷を深める紛争地の状況を語る、NHK・ETV特集「パンデミックが変える世界 紛争地帯からのSOS」（2020年9月19日放映）、レバノンに避難した120万から150万のシリア難民がコロナ禍で窮地に追い込まれていく様子を追った、NHKスペシャル「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」（2020年10月24日放映）などが参考になる。

人々はポスト・コロナ、アフター・コロナを構想、いや夢想している。

足下から冷静に見渡し、考えてみるなら、仮に戦場地域が拡大することなく平静に、またパンデミックが終息へと向かったとしても、もはや人類全体が「非常時の日常」にあるのではないだろうか。パンデミック以前に、いつのまにか「人新世（Anthropocene）」の時代が加速進行し、人類滅亡への坂道を不可逆的に転がり落ちているのではないだろうか。地球はすでに深傷を負い、その限界、プラネタリー・バウンダリー（Planetary Boundary）を超えつつあるのではないだろうか²¹。

環境活動家グレタ・トゥーンベリらに代表される若い世代の危機感がどれだけ響き渡っても、世界が、殺し合いに明け暮れてきて、成長に取り憑かれた人類が協働の歩調に向かうのは、途方もなくありそうにないことである。SDGs（持続可能な開発目標）や、DX（Digital Transformation）、GX（Green Transformation）は、大人世代にとっての免罪符になりかねない²²。これらに協働的なCX²³が連動す

ることが果たして可能なのか、2030年までの正念場として問われている。この時代認識からずれば、Society5.0とかGIGA（Global and Innovation Gateway for All）スクール構想などはもう「化石賞」ものなのかもしれない²⁴。

大人世代には、もとよりさほど時間は残されていないが、年少世代がこれと同じになることは、断じてあってはならない。「学習指導要領」は、20世紀末から「生きる力」を掲げ続け、2020年代の今日、ようやく「持続可能な社会の創り手」の育成を謳っている。遅きに失することにならないよう、地球環境の持続可能性を損なってきた大人世代は、将来世代が新しい社会を創る礎とな（れ）るよう、備えていくほかはないのだろう。

筆者としては、教職科目の制約は大きいですが、「非常時の日常」を軸に過去と今現在と近未来とを繋ぐ手がかりを探すことで、まだまだ足掻こうと思う。予期しなかったオンライン授業導入を機に、授業それ自体について考えながら、あらためてその思いを強くした。

（2021年2月5日提出）

²¹ J. ロックストローム、M. クルム（武内和彦・石井菜穂子監修／谷淳也・森秀行ほか訳）『小さな地球の大きな世界：プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』（丸善出版、2018年）参照。気候変動、海洋酸性化など九つのプラネタリー・システムが具体的に評価されている。

²² さしあたり、まずは、「SDGsは『大衆のアヘン』である！」とする、斎藤幸平『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020年）参照。

²³ 東京大学未来ビジョン研究センター主催のウェビナー「グローバル・コモンズ・スチュワードシップ：システム転換に向かう世界」（2021年1月19日）で、パネリストの一人、程近智氏（アクセンチュア株式会社相談役、経済同友会環境・資源エネルギー委員会委員長）は、CXとしてcountries、company、community、capital、citizensの五つのCの転換を提案している。

²⁴ 2019年12月2日から13日まで開催されたCOP25（国連気候変動枠組条約第25回締約国会議）で、日本が2度も化石賞（Fossil Award）を受賞したことは、まだ記憶に新しい。パンデミックの影響で、昨年11月開催予定のCOP26は延期になった。

京都大学教育学研究科のE.FORUM 連続研究会、第11回「学校教育におけるICT活用」（2021年2月5日）で、1990年頃からICTを活用した教育方法を先駆的に実践し、研究してきた算数・数学教育研究者の黒田恭史教授（京都教育大学）は、「日本ではICTの教育活用が30年前から議論されてきたが、その歩みは遅々としてものであった、その原因究明なしに、端末を配布されても同じ轍を踏む」と問題提起を行い、「ICTの活用は、様々な困り事を抱える子どもたちのため、その個別ニーズに応えるため、次のステージへの教育を保障するために行う」と説いている。